



# ボランティア特集



## 佐藤 藤部衛学長は、福島県出身である。その福島を襲ったのが、東日本大震災。

あの東日本大震災から3年経った今、学生ボランティアとは、被災地に対するボランティアとは、どうあるべきなのか。佐藤学長に語っていただいた。

### 学長のボランティア哲学

「福島県をはじめ、被災地はまだまだ厳しい状況です。福島県の場合は被災したことに伴う影響に加え、津波や原発事故の影響も大きいことからまたまた助けを必要としています。」

目白大学の学生には積極的にボランティアに参加してもらいたいと思っています。ただボランティアに積極的に

参加するのは大事なことではあります。ボランティアをする側のボランティアをやりたいという気持ちが先行し強くなってしまつと、相手はどう思つかうかという気持ちで考えることが疎かになり、互いの気持ちのすり合わせが難しくなってしまう。

ボランティアの本質とは、誰かの助けをすることも重要ですが、活動を通してボランティアをする側が成長することにあります。相手の気持ちを考え、ボランティアをすることで結果として成長することができると考えています。

「ボランティア活動は、被災地はまだまだ厳しい状況です。福島県の場合は被災したことに伴う影響に加え、津波や原発事故の影響も大きいことからまたまた助けを必要としています。」



僧侶としての仕事に勤む廣澤先生。その経験を講義やゼミにも生かしている。

## 発達障害と向き合って

### ボランティア活動で得たもの

目白大学には、多種多様な個性豊かな教員が教鞭を執っている。その中でもひと際異彩を放っているのが、人間学部でも学科の廣澤満之准教授だ。何を隠そう先生は「僧侶」である。

先生は、自分を育ててくれた家族や地域の方を思い返し、その人たちに恩返しをするべきだと考えるようになった。僧侶になることを志す。

大学では他にも様々なことを学び、いくつかの出会いがあった。そのひとつがボランティアサークルとの出会いである。そのサークルで知的障害の児童と接する機会があり、「何が彼らにとって幸せなのか」を考えるようになった。そしてそのボランティア活動がきっかけとなり、教養の道に進むことを決意し、発達障害児の研究に従事するようになる。いわばボランティア活動が人生の進路を変えたといっても過言ではないだろう。

「私自身、ボランティア活動などを通して障害者ももちろん、外国人やセクシャルマイノリティの人々とも出会ってきました。その経験から多様性を

持ってお互いを認め合うことが素晴らしいことだと、痛感するようになった。

### そもそも発達障害とは

とはいえ、一般的に発達障害が何なのかは、あまり理解されていないのが現状ではないだろうか。その点を廣澤先生はこう説明する。

「発達障害の代表的な例は『自閉症』と呼ばれるものです。一般的に自閉症のお子さんに対して皆さんが考えている印象は、『コミュニケーションが苦手』か、『視線が合いにくい』、こだわりが強いなどだと思います。でも、ボランティア活動で障害を持った人と接していくうちに、教科書に書いてあることが全てではないと感じました。私がこれまで会ってきた自閉症の人たちの中で、視線が合わなかった人は一人もいなかった。コミュニケーションが苦手だと思われていますが、子どもも自閉症の方法で意思を伝えてくれています。つまり、こちら側の考え方をひきよせることによって、子どもの意思や伝えたいことを理解しやすくなると思います。」

「発達障害の代表的な例は『自閉症』と呼ばれるものです。一般的に自閉症のお子さんに対して皆さんが考えている印象は、『コミュニケーションが苦手』か、『視線が合いにくい』、こだわりが強いなどだと思います。でも、ボランティア活動で障害を持った人と接していくうちに、教科書に書いてあることが全てではないと感じました。私がこれまで会ってきた自閉症の人たちの中で、視線が合わなかった人は一人もいなかった。コミュニケーションが苦手だと思われていますが、子どもも自閉症の方法で意思を伝えてくれています。つまり、こちら側の考え方をひきよせることによって、子どもの意思や伝えたいことを理解しやすくなると思います。」

「発達障害の代表的な例は『自閉症』と呼ばれるものです。一般的に自閉症のお子さんに対して皆さんが考えている印象は、『コミュニケーションが苦手』か、『視線が合いにくい』、こだわりが強いなどだと思います。でも、ボランティア活動で障害を持った人と接していくうちに、教科書に書いてあることが全てではないと感じました。私がこれまで会ってきた自閉症の人たちの中で、視線が合わなかった人は一人もいなかった。コミュニケーションが苦手だと思われていますが、子どもも自閉症の方法で意思を伝えてくれています。つまり、こちら側の考え方をひきよせることによって、子どもの意思や伝えたいことを理解しやすくなると思います。」

### 地

地域社会学科三年の小菅利将さんは、バルーンアートとヘルマーク活動を中心とした被災地へのボランティアを行っている。

ボランティアを始めたきっかけは、父親に声をかけられたことだった。当時、社団法人全国子ども会連合会に所属していた父親は、自分たちも何かできることがあるのではないかと考えた。ボランティアを始めたきっかけは、父親に声をかけられたことだった。当時、社団法人全国子ども会連合会に所属していた父親は、自分たちも何かできることがあるのではないかと考えた。

新しい顔やアルパムに写真を入れ、持ち主に返却する活動のことである。夏には、気仙沼地域に被災地へのボランティアの写真洗洗を終え、その後は父親の得意分野だったバルーンアートを被災地で行うことにした。バルーンアートは、小学生を中心とした子どもたちの心のケアのために始めたものだ。

「震災がきっかけで自分たちが住んでいる被災地を嫌にならないうえ、ボランティアを始めた。最初の写真洗洗は、写真洗洗で被災地へ流されて汚れた写真を回収・洗浄し、最後は新しい顔やアルパムに写真を入れ、持ち主に返却する活動のことである。夏には、気仙沼地域に被災地へのボランティアの写真洗洗を終え、その後は父親の得意分野だったバルーンアートを被災地で行うことにした。バルーンアートは、小学生を中心とした子どもたちの心のケアのために始めたものだ。」

「震災がきっかけで自分たちが住んでいる被災地を嫌にならないうえ、ボランティアを始めた。最初の写真洗洗は、写真洗洗で被災地へ流されて汚れた写真を回収・洗浄し、最後は新しい顔やアルパムに写真を入れ、持ち主に返却する活動のことである。夏には、気仙沼地域に被災地へのボランティアの写真洗洗を終え、その後は父親の得意分野だったバルーンアートを被災地で行うことにした。バルーンアートは、小学生を中心とした子どもたちの心のケアのために始めたものだ。」

「震災がきっかけで自分たちが住んでいる被災地を嫌にならないうえ、ボランティアを始めた。最初の写真洗洗は、写真洗洗で被災地へ流されて汚れた写真を回収・洗浄し、最後は新しい顔やアルパムに写真を入れ、持ち主に返却する活動のことである。夏には、気仙沼地域に被災地へのボランティアの写真洗洗を終え、その後は父親の得意分野だったバルーンアートを被災地で行うことにした。バルーンアートは、小学生を中心とした子どもたちの心のケアのために始めたものだ。」

## エコアクションでアクティブラーニング！

### 飛田ゼミのエコプロジェクトが目指すもの

### 社

会学部地域社会学科の学生6名が6月、プロサッカークラブ・大宮アルディージャのエコボランティア活動に参加した。30度を越える暑さの中、アルビレックス新潟戦が行われるスタジアムで、学生たちはクラブのボランティアスタッフと共に、エコアクションのゴミの分別やゴミの交換、チ



大宮アルディージャ・スタジアム 試合後の清掃活動

ラシ配りや車椅子誘導、試合後の清掃活動などに精を出した。目白大学は大宮アルディージャのオフィシャルエコパートナーである。学生たちにはボランティア体験を積み、環境マインドを身につけ、またスポーツを通じた地域活性化の意義を学び、おもてなしの心を身につけてくれたらと思います。」

この活動を企画した社会学部地域社会学科の飛田満教授はその活動の意義を語る。

「参加した学生たちからもいろいろな感想が聞かれました。大宮アルディージャとの連携による学生エコボランティア活動は、今後も毎月1回程度のペースで11月まで実施される。」

また、飛田ゼミの学生7名が、エコギャラリー・新館の環境月間イベント「新館エコラリー」に参加し、来場者に本学のエコアクションの取り組みについて紹介した。パネルの展示のほか、目白グッスの景品付きエコクイズなど、関心を持ってもらうための工夫を凝らした。あいにくの天候にも関わらず、会場は多くの出展者や来場者で賑わった。

エコギャラリー・新館 エコランジャーとともにポーズする飛田ゼミ

## ボランティアが人生を変える

### 美容師志望から目白大学へ



自作のバルーンアートを手に持つ小菅くん。

「自分は今何ができるのかを、探して、やってみよう。一人でも大切な人だと思えます。一人でも大切な人だと思えます。一人でも大切な人だと思えます。」

「震災がきっかけで自分たちが住んでいる被災地を嫌にならないうえ、ボランティアを始めた。最初の写真洗洗は、写真洗洗で被災地へ流されて汚れた写真を回収・洗浄し、最後は新しい顔やアルパムに写真を入れ、持ち主に返却する活動のことである。夏には、気仙沼地域に被災地へのボランティアの写真洗洗を終え、その後は父親の得意分野だったバルーンアートを被災地で行うことにした。バルーンアートは、小学生を中心とした子どもたちの心のケアのために始めたものだ。」

## ボランティア活動をさらに支援

目白大学はボランティア活動を今後さらに奨励していく計画である。「学外の様々な人々との交流と、各種の体験を通じて、実社会で役に立つ知恵と真のコミュニケーション能力を身につけ、人間としての幅を広げる」ためであると、大学側はその理由を説明する。これに含まれるのは、大学でのボランティア活動だけではなく、地域活動、全国活動、海外活動などの一般のボランティアである。また、「福祉関係では、このほか、共助の精神や弱者への思いやりの心を育てる」とし、福祉ボランティアも奨励していく意向である。

アンケート結果によると、目白大学ですでに約1300人もの学生が何らかのボランティア活動を体験している。つまり、本学ではおよそ6人に1人がボランティア活動に参加しており、学生がいかにボランティア活動に熱心かが読み取れる。今学期新館キャンパスでボランティア研修会を開いた際、約80名以上の学生が参加。その中で53名がこの夏休みに何らかのボランティア活動に従事する予定で、大学側が無償でボランティア保険加入を支援する。

大学はボランティア活動をさらに支援・斡旋するために平成27年度以降、「新館、岩槻キャンパスの兼務担当者に加え、新館にはボランティアコーディネーターの有資格者を非常勤で配置」することも検討しているという。他にも、これまでのボランティア保険加入、災害救助ボランティア講座実施、ボランティアの受付・紹介・研修の計画と実施などに加えて、地域連携事業の計画・支援・実施や交通費補助などが検討事項として挙げられている。大学は学生による個人・グループ・課外活動でのボランティア活動などを重要な社会貢献の一環として捉えており、大学としてこれからもさらに支援・奨励を強化していく計画である。

(編集部)



# ウーマン・イン・メジロ —女性たちの視点—

1963年に設置された目白大学女子短期大学から続く目白大学短期学部は一貫して女性の教育に貢献し、女性の社会進出を後押ししてきた。いわば、本学は女性の教育に打ち込み、個性豊かな女性を育て、社会に送り出してきたといえる。そんな本学内で様々な視点を持ち、活躍する女性たちにスポットを当てた。

## ありふれた自然の中に秘められた面白さ 大出先生が教える植物や昆虫の不思議

10号館の教室で、「身近な植物観察のすすめ」という植物学の授業が行われている。240人余りの学生が受講するこの授業は、身近にありながらも、普段わざわざ見たり触ったりする機会のない植物について、幅広い視点から見つけ直す機会になっている。実際に見て、聞いて、触ってその植物自体を理解するだけでなく、それに密着して関係してゆく虫や私たち人間や自然について、言わなければ地球環境や遺伝子といった自然環境全体についての講義内容となっている。

### 生きているって面白い

立園芸協会のコースで1年間園芸や植物の管理をしながら知識や技術を習得し、種苗会社の社員や大学院に入り直すなど、実に多種多様な経歴を経て今に至っている。大出先生は、この講義で植物の身近さ、面白さに気付いて欲しい、と語る。

### 五感で感じる授業

先にも書いたように、この講義はまさに五感を使った内容になっていく。例えば、稲について講義で実際に大出先生が様々な米を炊いて教室に持ち込んだことがあった。授業後に食べたい人は食べられ



身近にある自然を通して知識を広げたいと語る大出非常勤講師。

## テレビでも活躍！

## 吉井奈々さんに聞く「コミュニケーション術」

「コミュニケーションが浅くなっている」と言われる現代で、人はどう人と接すればいいのかわからない。結婚しない夫婦になるための婚活塾や、大学の講演、テレビへの出演、執筆活動など、マルチな才能を多方面で発揮している。

「コミュニケーション」が上手に出来たら、とか、「〇〇と上手に喋れたら」とか、どんなことでも良いから自分の良かったところを振り返ることもポジティブな自分作りにつながります。失敗は誰でもしています。なので失敗は怖がらず、失敗しても良いんだ、成功しなかったけど少し成長できた、と心掛けて、若い頃は怖がらずに人と接することや、自分の良かった所を振り返ったりして、ポジティブな自分であることをコミ

「これから社会に出る学生たちは、会社の上司などの立場にいる人々とどうやってコミュニケーションを取るか、これが一番大事です。」

「男女のコミュニケーションも難しいですね。今の世の中では、女性の力が強くなってきている傾向にあると私は感じています。それは昔と比べて、女性の方がコミュニケーションの取り方も変わってきていると思います。」

「今、韓国で暮らすということ。これは時代の流れを大切に接していければ理想的な関係になるのではないかと願っています。」

「今、学期が始まったボラティア活動がある。それは「ノートテイク」といって、目白大学短期大学部製菓学科の新人学生聴覚障がいのある1年生、山口清花さんのために講義ノートを作成する活動です。」

「今、韓国で暮らすということ。これは時代の流れを大切に接していければ理想的な関係になるのではないかと願っています。」

「今、韓国で暮らすということ。これは時代の流れを大切に接していければ理想的な関係になるのではないかと願っています。」



吉井奈々さん プロフィール  
元男性でありながら女性として中学時代の同級生と結婚をし、それを機に恋愛やコミュニケーションを学びながら「離婚しない夫婦になるための婚活塾」ウィステリアを設立し、多くの男女の悩みをサポート、アドバイスしている。著書に「男に生まれて、女になって、結婚も出来ました」日本文芸社

「コミュニケーションが浅くなっている」と言われる現代で、人はどう人と接すればいいのかわからない。結婚しない夫婦になるための婚活塾や、大学の講演、テレビへの出演、執筆活動など、マルチな才能を多方面で発揮している。

「これから社会に出る学生たちは、会社の上司などの立場にいる人々とどうやってコミュニケーションを取るか、これが一番大事です。」

「男女のコミュニケーションも難しいですね。今の世の中では、女性の力が強くなってきている傾向にあると私は感じています。それは昔と比べて、女性の方がコミュニケーションの取り方も変わってきていると思います。」

「今、韓国で暮らすということ。これは時代の流れを大切に接していければ理想的な関係になるのではないかと願っています。」

「今、韓国で暮らすということ。これは時代の流れを大切に接していければ理想的な関係になるのではないかと願っています。」

「今、韓国で暮らすということ。これは時代の流れを大切に接していければ理想的な関係になるのではないかと願っています。」

「今、韓国で暮らすということ。これは時代の流れを大切に接していければ理想的な関係になるのではないかと願っています。」

「今、韓国で暮らすということ。これは時代の流れを大切に接していければ理想的な関係になるのではないかと願っています。」

## 今、韓国で暮らすということ

「今、韓国で暮らすということ。これは時代の流れを大切に接していければ理想的な関係になるのではないかと願っています。」

「今、韓国で暮らすということ。これは時代の流れを大切に接していければ理想的な関係になるのではないかと願っています。」

「今、韓国で暮らすということ。これは時代の流れを大切に接していければ理想的な関係になるのではないかと願っています。」

「今、韓国で暮らすということ。これは時代の流れを大切に接していければ理想的な関係になるのではないかと願っています。」

「今、韓国で暮らすということ。これは時代の流れを大切に接していければ理想的な関係になるのではないかと願っています。」

「今、韓国で暮らすということ。これは時代の流れを大切に接していければ理想的な関係になるのではないかと願っています。」

「今、韓国で暮らすということ。これは時代の流れを大切に接していければ理想的な関係になるのではないかと願っています。」

「今、韓国で暮らすということ。これは時代の流れを大切に接していければ理想的な関係になるのではないかと願っています。」

「今、韓国で暮らすということ。これは時代の流れを大切に接していければ理想的な関係になるのではないかと願っています。」

「今、韓国で暮らすということ。これは時代の流れを大切に接していければ理想的な関係になるのではないかと願っています。」

「今、韓国で暮らすということ。これは時代の流れを大切に接していければ理想的な関係になるのではないかと願っています。」

「今、韓国で暮らすということ。これは時代の流れを大切に接していければ理想的な関係になるのではないかと願っています。」

「今、韓国で暮らすということ。これは時代の流れを大切に接していければ理想的な関係になるのではないかと願っています。」

「今、韓国で暮らすということ。これは時代の流れを大切に接していければ理想的な関係になるのではないかと願っています。」

「今、韓国で暮らすということ。これは時代の流れを大切に接していければ理想的な関係になるのではないかと願っています。」

「今、韓国で暮らすということ。これは時代の流れを大切に接していければ理想的な関係になるのではないかと願っています。」

「今、韓国で暮らすということ。これは時代の流れを大切に接していければ理想的な関係になるのではないかと願っています。」

「今、韓国で暮らすということ。これは時代の流れを大切に接していければ理想的な関係になるのではないかと願っています。」



韓服を着て韓国を観光する学生さん。

目白大学新聞第37号  
編集長 武田 愛  
編集 野澤 兼斗  
関 信一郎  
黒木 美完  
小川 裕加

小倉 春花  
早川 優梨香  
森野 理佳  
今村 友美



『目白大学新聞』についてご意見、ご感想をお寄せ下さい。  
EMAIL: shimbun@mejiro.ac.jp FAX: 03-5996-3060